

# 初期中世ローマに向けられる視線 中世ローマ美術をめぐる近年の動向

鼓 みどり

Gaze onto Early Medieval Rome: Recent Trend of Medieval Roman Art

Midori TSUZUMI

E-mail : midori@edu.u-toyama.ac.jp

## Abstract

What we look at in Early Medieval Rome? There are splendid churches built by Pope Paschal I, old icons of the Virgin, many chapels and shrines of saints and a lot of faithful from all over the world. This paper looks on recent exhibitions at Rome and well-educated guide books at first. Important colloquiums on Medieval Rome were held around the year 2000 and we can grasp trends and interest on this field. We find a lot of important studies on holy beings, especially icons and saints relics. The method of cultural studies influenced on researches and exhibitions of Medieval Roman art.

キーワード：ローマ 初期中世 聖顔 聖人崇敬

keywords : Rome, Early Medieval, Holy face, veneration of Saint

## はじめに

初期中世ローマは帝政末期の混乱やゲルマン諸族との折衝、東ローマ帝国の圧力への対応、布教と教会組織の運営などの課題に対処しながら数々の教会堂を建立し、モザイクや壁画、浮彫などで壮麗な建築空間を作り上げた。その後、ルネサンスやバロックの都市として大きく発展していくが、西ローマ帝国崩壊後は、都心も郊外もかなり荒廃した。帝政期に比べて都市の規模は縮小するが、ローマ教会は新たな教会堂を建立して教会組織の拠点作りに没頭した。

初期中世のローマ美術は、同時期の西歐美術とは分けてとらえられるのが一般的で、他地域の美術をリードする模範や原型を提供する役割を担っているとされてきた。またローマ教会が東ローマ帝国の文化を西歐に普及させる交流の担い手であったことも重要であろう。同時にフランク王国と東ローマ帝国の狭間でローマはモザイクのような独自の技法を発展させ、初期ビザンティンのアイコンや聖遺物容器など、さまざまな美術作品がコレクションされている。ローマは現在もカトリック教会の中心であり、多くの巡礼が訪れる宗教都市である。本稿は、ラテン世界の中心でありながら、他の地域とは一線を画す中

世ローマの美術について、近年いかなる視点から検討されてきたかを展望する。鍵となるトピックとして、アイコンと聖人やいは聖遺物崇敬に特に着目する。

## 1 展覧会とガイドブック

西暦2000年前後に、ローマで多数の展覧会が開催され、各国研究所において活発に研究集会が開かれたことは、記憶に新しい。聖年を記念したこれらの催しは、ローマにおける中世美術の展開を改めてとらえ直し、21世紀に向けて諸研究を再度編纂する試みであったといえる。同時に、ローマを訪れる一般の観光客や、歴史ある諸教会堂の参拝者、巡礼者に対し、従来よりも教会堂建築や諸美術作品を理解してもらうような書籍の刊行も盛んである。

2000年夏、ローマのカンチェレリア宮殿で2つの展覧会が開催された。まず福音書写本を中心とした“Codice B - I Vangeli dei popoli”は、ヴァティカン図書館のコレクションを中心に、初期キリスト教時代から近世に至る福音書の歴史をたどっていた。オリジナルの写本とファクシミリを組み合わせたラインアップは、聖書学、書誌学、写本学的な関心にも応え、また東西中世写本彩飾の展開を余すところなく示していた。会場はほぼ一部屋であったが、内

容の充実ぶりは、展覧会カタログの記載に明らかである<sup>1</sup>。なおこの展覧会を日本で再現したのが、2002年の印刷博物館開館特別展「ヴァチカン教皇庁図書館展：書物の誕生：写本から印刷へ」である<sup>2</sup>。

一方、“Pietro e Paolo”は、キリスト教ローマの基盤を築いた使徒ペテロとパウロをあらわした初期キリスト教美術作品を集めた内容である。石彫、石棺、象牙、金工、金彩ガラスから旧サン・ピエトロ教会堂の壁画模写に至る、多彩な作例に、両使徒の功績や姿が繰り返し表現されていることが分かる<sup>3</sup>。紹介されている作品は、既によく知られているものが多いが、ペテロとパウロに焦点を当てることで、ローマにおけるキリスト教美術の確立に改めて注目させている。これは1980年代から1990年代にかけて集中的に発表されたH. L. ケスラーの初期キリスト教ローマ美術に関する論考とも通じる傾向である<sup>4</sup>。

さらに2000年12月から開催された“*Il Volto di Cristo*”展は、マンディリオン、聖顔と呼ばれる「人の手によらない」奇跡的なイコンとその複製を集めた展覧会であった<sup>5</sup>。イコンはビザンティン美術並びに東方正教を象徴するが、ラテン世界の中でとりわけローマにおいて、イコン崇敬が実施されていた。現在でもサンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会堂のように内陣にイコンを掲げて、信徒が祈りを捧げている姿を目にすることができる。イコンは中世ローマにおいて、大変重要な意味を持っている。展覧会カタログは、7つのセクションそれぞれに第一線の研究者による論文を掲載し、関連する作品のカタログが続いている<sup>6</sup>。展覧会を見学した際、展示作品のラインアップを良く理解することができなかった。6世紀のイコン、11世紀ビザンティンのコスマス写本、マンディリオンとそのコピー、13世紀イングランドの黙示録写本、さらに近世のキリスト像絵画や版画類を一つにまとめるテーマが理解しにくかった。珍しい作品を実見できることにひたすら満足した記憶がある。しかし改めてカタログを眺めると、ここに集められているのがキリストを描写したものと言うよりは、キリストに接触して成立した像およびその複製であることに気づかされる。それは視覚が意識的に捕らえた像ではなく、鏡などに映し出された姿の痕跡と考えられる。この点について、のちに詳しく検討する。

ローマには、コロッセオのようなローマ帝国時代から17世紀バロックに至る数々のモニュメントが建ち並んでいる。連日、多くの観光客が訪れるが、見学のし易さや解説パネルなどの整備は十分とは言えなかった。21世紀を迎え、あまり知られていない教会堂にも、解説パネルが設置されるようになり、実地調査もやりやすくなった。ただ写真撮影に対し、許可しなくなった場所もある。サン・クレメンテは地上階も地下聖堂も禁止となり、非常に残念である。ナヴォナ広場のように長期にわたって修復が行われていた場所が、完全に覆いを取った姿で見られるようになったのはここ数年のことである。

見学に必要なのが、充実したガイドブックである。これまでイタリアの研究者による総説と美しい図版が集められた書物が多かったが、本格的研究の出版も活発である。ブランデンブルグが2005年に出版した『*Ancient Churches of Rome*』は、ローマ市内の初期キリスト教時代に建立された教会堂の総覧で、現存する事例の図版と平面図、資料図版を編纂している<sup>7</sup>。本書は先端的な研究と言うよりは、資料集と呼ぶにふさわしい。ソフトカバー1冊にまとめられているので、ローマの教会について手軽に参照できる。また掲載されている図版の質が高く、ぜひ現地でモニュメントを見たいと思わせる力がある。

観光における美術鑑賞は、作品の背景を知ること、より充実した体験になる。M. サンデルは、ローマのモザイクを巡るエッセイで、6世紀、9世紀、12世紀の主要な教会堂、すなわちサンタ・マリア・マジョーレ、サンタ・プラッセーデ、サン・クレメンテなどを紹介している<sup>8</sup>。本書は専門書ではないが、より知的な観光を実現させるために、中世美術史の理解がどのように必要であるかを良く示している。

展覧会や聖年の儀式は、例年以上に多くの人々をローマに向かわせたであろう。彼らはかつて巡礼たちが行ったように、聖顔を見つめ、崇敬する。

## 2 研究集会

2000年には、中世美術史の研究集会が盛んにローマで開催された。既にあげた展覧会に関連するものの他に、献呈論集、大規模な研究集会の成果を編纂したもの、そしてテーマを絞った研究集会それぞれ

が、興味深い内容で刊行されている。

研究論集『初期中世のローマ』は、1998年に中世史学者 D. A. バーロウの70歳を記念してセント・アンドリューズで行われた研究集会の成果である<sup>9</sup>。初期中世ローマの歴史、美術史、考古学、教会史などの専門家がバーロウのもとに集い、古代末期から初期中世のローマとラテン世界をめぐる論考を発表している。アルジェンティは古代ローマの中心であったパラティノ丘が、中世ローマの権力に踏襲された事実を示し、場の伝統を指摘した<sup>10</sup>。ノーブルは中世ローマにおける手工業生産の実態を精査し、都市の経済基盤を明らかにしようと試みた<sup>11</sup>。スミスはローマに由来する聖遺物が、フランク王国でいかに受容されたかをたどった<sup>12</sup>。

2000年9月にローマで開催された研究集会『都市の教会 (Ecclesiae urbis)』の論文集は、全3巻に90編の論文が収録されている<sup>13</sup>。全18セッションの冒頭は、1994年に没した中世ローマ建築史の第一人者 R. クラウトハイマーに捧げられている。第1巻では地誌と教会堂造営、2巻では建築、3巻では彫刻と教会堂装飾が論じられている。イタリアの研究者が多いため、現地調査に基づく研究が目立つ。ローマを代表するモニュメントが網羅されているが、8世紀から9世紀の教会堂装飾は含まれていない。第1巻は概論やトポグラフィ、第2巻は建築や修復、そして第3巻に彫刻、壁画、モザイクおよび図像に関する論文が集められている。取り上げられたモニュメントとして、サンタ・サビーナ<sup>14</sup>、サンタ・プデンツィアーナ<sup>15</sup>、サンタ・マリア・アンティークァ等である<sup>16</sup>。

特定のテーマに絞った研究集会として、2000年にローマ英国研究所で行われた、サンタ・マリア・アンティークァ研究集会 (Santa Maria Antiqua al Foro Romano cento anni dopo)"がある<sup>17</sup>。この初期中世の教会堂がフォロロマーノで発見されてから100年が経過したことを記念し、長年研究に従事してきた P. J. ノルドハーゲンをはじめ、各国の研究者たちの論文が集められている。このモニュメントは見学の機会が少なく、限られたカラー図版とモノクロ図版と描き起こしで確認しなければならなかった。本書に掲載されている図版は、さらなる理解の助けとなっている。研究者の顔ぶれは国際的で、ブレンクはギリシャ系教皇による造営事業について論じ<sup>18</sup>、ニルゲンはサンタ・マリア・アンティークァ

の磔刑像と凱旋門型アーチの伝統を紹介した<sup>19</sup>。最後にノルドハーゲンが40年従事してきた調査研究を回顧し、壁画の修復について見解を述べている<sup>20</sup>。

2001年にスポレートで開催された初期中世研究集会「東方と西欧の間のローマ」<sup>21</sup>において、H. L. ケスラーはカロリング美術にユダヤ的な要素とフランク的な要素を見だし、ローマの初期中世美術の意味を探求した<sup>22</sup>。アンダローロとヴォルフはそれぞれローマで崇敬されてきた聖母イコンを取り上げた<sup>23</sup>。

イタリア以外の研究者が中心となって開催された中世ローマに関する研究集会は、“Roma Felix”にまとめられている<sup>24</sup>。本書はカラマズーとリーズ(2003)およびマイアミ(2005)での成果14編を収録している。建築史、教会史等の研究者が中世ローマを検討し、キリスト教都市ローマの形成や、西欧の周縁に位置するブリテン諸島とローマの関係に注目している。

このように、2000年を境に中世ローマ研究に活気が認められる。また中世ローマ美術のモノグラフも相次いで出版されている。教皇パスカリス1世(817-824)の教会堂建設や聖遺物荘厳について、ヴィスキルヒェン、チューノ、グッドサンがそれぞれモノグラフを出版した<sup>25</sup>。

### 3 ローマと聖顔、イコン崇敬

既に触れた2000年の“*Il Volto di Cristo*”で、ローマにおける聖顔すなわちキリストの顔が集められていた。集められた作例は初期キリスト教時代から近代まで幅広く、印刷物も含まれていた。ローマにはギリシャ系修道院が建立され、イコン普及の拠点となった。既に1988年にローマで特に崇敬を集めていた聖母イコンの展覧会が開かれている<sup>26</sup>。キリストの聖顔イコンは、人の手によらない奇蹟のイコンとして現在でも多くの人が参拝する。ラテラノ宮殿に近いサンタ・スカラ教会堂サンクタ・サンクトールムでは熱心な信徒が膝で階段を上りイコンの安置されている上階へ向かう。この聖顔は繰り返しコピーされ、各地で崇敬されてきた。サンクタ・サンクトールムの聖顔自体、原本を忠実に写したものと考えられている。

ローマの聖顔イコンに注目が集まるようになった背景には、H. L. ケスラーの精力的な研究活動があ

る。ケスラーは初期中世美術におけるローマの重要性を、旧サン・ピエトロ聖堂壁画旧約・新約サイクル(17世紀のデッサンが現存)に求めた<sup>27</sup>。これと並行してケスラーは、キリスト教美術が聖なる存在を聖画像で描出する経緯を、ビザンティンと西欧双方に着目して探求している。特にキリストの顔に接触した素材に転写された「人の手によらないアイコン」は、東方起源とされるが、ローマにもたらされ、マンティリオン、或いはヴェロニカと称され、無数の複製を生み出し、非常に崇敬された。ケスラーは一連の論文をまとめて、中世における聖画像をめぐる問題を深く掘り下げた<sup>28</sup>。

本書に収められた8点の論文の中で、聖像論やアイコン崇拝に関連するものは4件である。1993年に発表された「議論としての中世美術」<sup>29</sup>の冒頭で、アレクサンドリアのキュリロスやヨハネス・クリュソストモスの言説と『ヘブライ人への手紙』が、旧約と新約が影／像、下絵素描／仕上げ彩色と見なされ、キリスト教が美術に肯定的であったことを示唆した。イメージが言葉をしのぐと解され、聖像論争の際、聖像擁護の強力な武器となった。ケスラーは、アンティオキアのコンスタンティヌス(インド航海者コスマス)著『キリスト教地誌』挿絵が、「キリストの再臨」、「タバナクル」に影／像の対比を巧みに描出していることを解き明かした。さらに聖顔を至聖所の幕との類似から検討し、キリストの到来によって旧約の覆いが除かれ、信徒が神を直視するという註解を、キリスト教美術の基盤と見なした。

ケスラーは既に1996年に聖顔アイコンをテーマとした研究集会をヴォルフとともに組織し、その成果を1998年に刊行した<sup>30</sup>。そこに収録された「不可視の形状:聖顔の複製と写し」<sup>31</sup>は、アイコンをめぐる神学的議論を紹介し、キリストの顔を転写したとされるマンディリオンの由来をアブガロス伝説にたどった。ケスラーが強調したのは、マンディリオンが接触によって成立し、人間の手が関与していない点である。アブガロス王の求めに応じて、キリストは手ぬぐい顔を押す、スタンプのようにその肖像を布上に残した。これは画家の筆或いは人の手によらない奇跡的な聖画像である。さらにマンディリオンの触れた陶片にキリストの顔が転写されたケラミオンは、その写しを教会堂装飾に見いだすことができる。イコノクラスム(聖像論争)の焦点は、アイコンが単なる物質にすぎず偶像に等しいとする聖像破

壊論と、アイコンは聖なる存在との物理的接触によって聖性を付与されたとする聖像擁護論の対立である。ここではビザンティンの事例が中心で、ローマに関しては聖顔アイコンに触れるのみである。しかしアイコンと原型の関係を丹念に整理し、中世美術における不可視の存在を可視化するメカニズムを明らかにしている点が重要である。なおケスラーは1997年から98年に聖像論争の鍵とも言うべきモーセの第二戒について、ビザンティンの見解を丹念にたどり、9-12世紀の作例を検討した<sup>32</sup>。また2000年には説話サイクルにおけるアイコン的表現について、ドーラ・エウロポス(3世紀)からジオット(13世紀)に至る幅広い事例を展望した<sup>33</sup>。

通常のキリスト像は少し離れた位置から捉えられているので、中世美術ではあるが、観者と同じ空間にいるような印象を与える。物語の一場面を見るように、日常の視覚体験とほぼ同じである。しかし聖顔アイコンはキリストの顔が布や陶片に転写された画像(の写し)であるため、扁平に見えている。また背景の描写はなく、観者は聖顔を比較的近距離から直視するように誘導されている。聖顔のまっすぐな視線は、観者のまなざしを捉え、その内面を透過するかのごとき強さを秘めている。これは顔と顔、目と目を合わせた状態を実感させる装置と言えるだろう。

木俣元一氏が詳細に検討している13世紀イングランド写本挿絵にコピーされたヴェロニカは、13世紀初頭に教皇イノケンティウス3世の主導で盛んになったヴェロニカ信仰の表れであることが明らかになった<sup>34</sup>。

聖顔アイコンがローマ社会で果たした役割について、ノレーンはラテラノ地区のサンティッシモ・サルバトーレ同信会の形成を丹念に検討し、サンクタ・サントールム聖顔アイコンとサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂アプシスの聖顔がいかに広く知られていったかを示した。そして12世紀以降、同信会がラテラノの真のキリスト像崇敬を振興させたことをたどった<sup>35</sup>。

ローマにはイコノクラスム以前に制作された聖母アイコンが崇敬を集め、その写しも多数制作されてきた。聖母図像研究は長い伝統を持ち、特にローマでは聖母崇拜の高まりを反映するさまざまな図像表現が登場してきたことは、改めて述べるまでもない<sup>36</sup>。被昇天の典礼で、ラテラノ宮からキリストの聖顔アイコンが行列してサンタ・マリア・マジョーレの「ロー

マ救済の聖母」イコンを訪れる。サンタ・マリア・イン・トラステヴェレや、サンタ・マリア・マジョーレのイコンについて、註17にあげたアンドローロとヴォルフの研究が比較的新しい。また2009年にヤコボネは、ローマにおける聖母図像成立の神学的背景と、カタコンベ、石棺、教会同造営、モザイク、壁画、イコンに現れた聖母像についてコンパクトにまとめている<sup>37</sup>。ローマの聖母図像について、コンパクトにまとめた手引きであり、レオ教皇の説教を中心とした、テキストのアンソロジーが充実している。なお2章で紹介したサンタ・マリア・アンティークァに見られる壁画イコンについて、別の機会に取り上げたい。

中世以来、無数の人々が、ローマを訪れ、聖顔や聖母イコンを崇敬した。彼らはその記念にバッジ、小型のレプリカ、画像が印刷されたカードなどを現地で買い求め、大切に持ち帰った。その一つ一つは美術作品としての水準は高いとは言いがたい。しかしその流通量は膨大で、そこに込められた信徒たちの熱意も、社会を活気づけていた。聖顔展カタログ後半に、このようなイメージの例を見ることができる。既に1989年にフリードバーグは、複製も含めた祈念イメージが人の心情に働きかける機能と社会における意味を、中世後期以降のイタリアやドイツに広がる巡礼グッズに探った<sup>38</sup>。本書で紹介された事例は聖母像が多く、その原型がローマのサンタ・マリア・マジョーレ型聖のイコンに求められる。美術作品としての質よりも向き合った人の内面や社会との関わりに焦点を当てる姿勢は、1990年前後に登場した「ニュー・アート・ヒストリー」の特徴である。そしてこの視覚文化論的な流れは、イコンの受容や聖遺物崇拝の研究に新たな展開をもたらしている。社会におけるアートの働きは、従来の美術史研究では対象とされなかった事例に注目を促す。

#### 4 聖人の都ローマ

2010年から2011年にクリーブランド、ボルティモア、ロンドンを巡回した展覧会「天の宝 (Treasures of the Heaven)」は、聖遺物崇敬にまつわる美術を集め、初期キリスト教から東西中世、そして近世にいたる充実した内容であった<sup>39</sup>。筆者は大英博物館で見学して、時代順に選りすぐられた作品群を前にして、しばしば立ち止まった。最後には「現代の

聖人崇敬」とも言うべきセレブリティたちの顔が次々と投影されていた。エルヴィス・プレスリー、ダイアナ妃、マイケル・ジャクソンなど物故者が目立つ。彼らの身につけた衣装や愛用の品は、高額で落札されて話題になることが珍しくない。それは熱心なファンにとっては、「聖遺物」であろう。一見場違いの映像は、展覧会の意味を見る人に共感を持って理解させてくれる。

聖遺物とは、キリストや聖母、使徒、聖人の残したものであり、身体の一部から衣服や道具、接触した物質など多岐にわたる。2009年に秋山聡氏が聖遺物崇敬に関するモノグラフを出版され、聖遺物と聖遺物容器に対する理解を大いに助けている<sup>40</sup>。聖遺物の崇敬は奇跡を起こす効力に負うところが大きい。キリストと聖母は格別重要視される。両者は昇天したため、この世に遺体を残していない。従って衣服や用具、接触したものが聖遺物となる。特にキリストは、受難具や聖血とともに真の十字架の断片が最も重要な聖遺物とされた。十字架となった樹木を主人公とする「聖十字架伝説」は『黄金伝説』に収録され、ピエロ・デラ・フランチェスカ作の壁画がアレツォに残されている。

真の十字架はまずビザンティン世界で崇敬を集め、おびただしい数の十字架片が生み出されていった。十字架型や受難伝図像を伴った容器に収められ、教会の宝として大切に扱われた。やがて真の十字架の遺物は4世紀にローマにもたらされ、教皇パスカリスI(在位817-824)がラテラノ宮に設けられたサンクタ・サンクトールム(至聖所)に聖十字架遺物を納めた<sup>41</sup>。

パスカリスが奉納した聖十字架の遺物は、エマイユの十字架型聖遺物箱とそれを収納する長方形の銀箱、十字形銀箱と宝石十字架からなる。銀箱のふたと側面には、キリストの生涯が打ち出し式浮彫であらわされている。2002年にトゥーノが刊行したモノグラフは、この聖遺物容器群を装飾するキリスト伝図像を検討して全体のプログラムを呈示して、9世紀初頭のローマの教会堂装飾刷新を再検討した<sup>42</sup>。聖十字架は、地上に残されたキリスト受難の最も重要な証である。そのため聖遺物容器は十字架をかたどったり、受難伝図像を伴う場合が多かった。パスカリスの宝物の十字形銀箱には受難と復活の場面が浮き彫りされ、この伝統を継承している。さらにエマイユの十字架にはキリスト幼児伝と洗礼の場面替

描かれている。ここに受難の前提となる受肉が描出され、宝物全体で贖罪論を構築するプログラムを成している。9世紀初頭は贖罪論が図像生成や造形活動に積極的に取り入れられ始めた時期であり、2001年にシャゼルがモノグラフで明らかにしたように、活発な神学的著述と大胆かつ多様な図像の実験が繰り返された<sup>43</sup>。しかも聖十字架の断片は。キリストの贖罪のための死をもっとも雄弁に証している。さらに既に触れたパスカリスの宝物が安置されたのは、ラテラノのサンクタ・サンクトールム、すなわち至聖所である。至聖所とは旧約でモーセが神から授かった律法板等を取めた契約の櫃を安置するために幕屋内部に設置されたスペースであった。キリスト教では契約の櫃を聖体容器と見なし受難の時に神殿の幕が破れ、その奥の至聖所は最後の審判後に実現する天の王国を象徴すると考えられた<sup>44</sup>。トゥーノはパスカリスがサンクタ・サンクトールムに納めたコレクションを丹念に検討し、パスカリスの宝物が『ヘブライ人への手紙』10章19-20節に記されたキリストの贖罪による救済をあらわしていることを導きだした<sup>45</sup>。

初期中世のローマは、西ヨーロッパ全域に膨大な聖遺物を供給する都市であった。殉教者の遺体は郊外の墓地に埋葬され、記念教会堂に祀られて信徒に崇敬されていた。しかし西ローマ帝国崩壊後、社会の混乱が広がり、都市ローマの規模も縮小され、郊外の殉教者記念教会堂の存続が困難になってきた。この事態を解消するために、7~8世紀のローマ教皇たちは、都市の中に新たな教会堂を造営し、聖人の遺骨を郊外の墓地から市内教会堂へ移し、巡礼地ローマを確立した<sup>46</sup>。グッドソンは教皇による聖人崇敬施設整備の過程を明らかにし、特にパスカリスの活動を丹念に検討している<sup>47</sup>。聖人および聖遺物崇敬の高まりとともに、ローマは歴代教皇の造営事業によって聖地化のプロセスをたどった。新たな聖人の遺体が「発見」され、聖人伝が紡ぎ出され、奇蹟譚が流布する。ローマの主要な教会堂は、1000件を越す聖遺物を祀り、多くの信徒を集めていた。

カロリング朝フランク王国は聖人や聖遺物崇敬に積極的であり、さまざまな機会を使って多くの聖遺物を収集し続けた。ローマから聖遺物を招来する手続きはさまざまで、聖人が祀られている墓地礼拝堂や祭壇から遺物を持ち出すことも珍しくなかった。ソーが紹介したアインハルト『聖マルケリヌスとペ

トルスの聖遺物奉還』は、アインハルトがローマから来た助祭から聖遺物を斡旋され、使者をローマに派遣、聖遺物を聖人の墓から持ち出すが、仲介人は最も重要な聖遺物をソワッソン司教ヒルドウィンに横流しする。アインハルトは不正に気づき、聖マルケリヌスの遺物を所領のミヒャエルスベルクに奪還する<sup>48</sup>。テキスト後半はこの聖遺物がもたらしたさまざまな奇蹟を記述して、その威力を証言している。この例は奇蹟譚を含むものの無駄な脚色を廃して、9世紀頃の聖遺物奉還の実態を伝えている。聖遺物の供給地であるローマには、仲介業に携わる聖職者が暗躍し、二重斡旋や横流し、窃盗などを行っていた。またローマからパヴィア、ストラズブル、アーヘンに聖遺物が到着すると、大勢の人々が集まり、熱狂的にこれを迎えたと記され、聖遺物崇敬の高まりを伝えている。

なおアインハルトの文書にも、彼がローマから将来した聖遺物をアーヘンの宮廷でルイ敬虔王や王妃が崇敬する場面が登場する。スミスの研究が示すように、ローマの聖遺物は西欧の絶え間ない熱意と努力によって次々と送り出された。その結果ローマにもたらされたのはおそらく治安維持と安全保障であろう。ダットンが紹介している教皇レオ3世の誘拐事件は、800年前後のローマの不穏な状況を物語っている<sup>49</sup>。レオ3世は監禁から逃れ、パーデルボルンで799年にシャルルマーニュと会見した。ローマ教会は聖遺物を供給することで、フランク王国の後援を得ることができた。

ノーブルは2009年のモノグラフで聖像論争期のビザンティン、フランク、ローマ教会の聖像に対する主張を鮮やかに対比させた<sup>50</sup>。ビザンティンから発せられた聖像禁止令に対し、テオドゥルフの『カロリング文書』はイコンを人の手による偶像と見なす厳しい態度を取った。一方歴代ローマ教皇は一貫して聖像擁護の立場を取り、イコノクラスムから逃れてきた修道士を積極的に受け入れた。イコン崇敬に対する態度は、ローマ教会とフランク王国ではかなり隔たりがあったことが示されている。確かにイコン崇敬は西欧世界になかなか浸透しなかった。聖遺物崇敬において胸像や全身像の人型聖遺物容器が盛んに制作されるが、これを偶像視することはなく、むしろ顔を備えた聖遺物容器によって、参拝者の祈りが聞き届けられるコミュニケーションが成り立っていると推察できる。

イコンと聖遺物はそれぞれビザンティン世界と西欧を代表するかのように見なしがちであるが、バーバーはイコンを聖なる存在との接触によって発生した二次的な聖遺物と考えている<sup>51</sup>。マンディリオンやヴェロニカはキリストの顔に接触して発生した転写のコピーであるので、特にこの範疇に当てはまるだろう。イコンも聖遺物もキリストや聖人がかつてこの世で活動した証と考えれば、東西に偏らない普遍的価値を持つものであろう。そしてローマはイコンと聖遺物の双方を大切に守り西欧に普及させる源であったと言えるだろう。

## おわりに

本稿は、近年のローマ初期中世美術の研究動向を、特に聖像論と聖人・聖遺物崇敬を中心に展望した。聖像と聖遺物はローマに限らず近年の関心を集めるトピックであることは、「聖なるものの再現」をテーマにした大規模な展覧会が相次いで開催されていることや、現代の文化摩擦と宗教が深く関わっていることから納得できるだろう。また今回詳しく触れなかったが、サンタ・マリア・アンティークェやサン・ステファノ・ロトンドなど長期にわたって修復と調査が行われてきたモニュメントが作業の完了を迎えつつあり、最新の調査結果に基づくモノグラフの刊行が待たれる。聖年から10年以上が経過して、初期中世ローマへの関心はさらに高まっていくだろう。

1 D'AIUTO, F. et al. ed., *I Vangeli dei popoli La Parola e l'immagine del Cristo nelle culture e nella storia* / a cura di F. D'Aiuto, G. Morello, A. M. Piazzoni, (catalogo della mostra: Città del Vaticano, Palazzo della Cancelleria, 21 giugno - 10 dicembre, 2000), Roma - Città del Vaticano: Biblioteca apostolica Vaticana, 2000.

2 印刷博物館, 『ヴァチカン教皇庁図書館展: 書物の誕生: 写本から印刷へ』, 印刷博物館, 2002; 拙稿, 「日本における西洋中世写本挿絵研究の歩み」, 『富山大学人間発達科学部紀要』5巻1号, 2010, pp.151-160, esp. p.151.

3 DONATI, A., *Pietro e Paolo. La storia, culto, la memoria nel primi secolo*, Milano, 2000.

4 ケスラーの論考は以下にまとめられている。KESSLER, H. L., *Old St. Peters and Church Decoration in Medieval Italy*, (Collectanea 17), Spoleto, 2002.

5 WOLF, G., MORELLO, G., KESSLER, H. L., et al., *IL volto di Cristo*, Milano, 2000.

6 1. 導入, 2. 人の手によらないキリスト像, 3. マンディリオン, 4. ヴェロニカ, 5. 失われたエメラルド或いはキリストの横顔, 6. 聖顔, 7. 複製された聖骸布。執筆陣には H.ベルティング, M.アンダローロ, H. L.ケスラー, G.ヴォルフなど, 各国の研究者が名を連ねている。

7 BRANDENBURG, H., *The Ancient Churches of Rome: From the Fourth to the Seventh Century*, Turnhout, 2005. 原著はドイツ語で2004年に出版。Idem, *Die frühchristlichen Kirchen Roms vom 4. bis zum 7. Jahrhundert: der Beginn der abendländischen Kirchenbaukunst*, Festschrift von Arnaldo Vesco, Regensburg, 2004.

8 SUNDELL, M., *Mosaics of the Eternal City*, (ACMRS Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies Occasional Publications 3), Tempe, 2007.

9 SMITH, J. M. H. ed., *Early Medieval Rome and Christian West Essays in honor of Donald A. Bullough*, Leiden, 2000.

10 ARGENTI, A., Continuity and Discontinuing a Seat of Power the Palatine Hill from the fifth to the Tenth Century, *Early Medieval Rome*, pp. 43-53.

11 NOBLE, T. F. X., Paradoxes and Possibilities in the Sources for Roman Society in the Early Middle Ages, *Early Medieval Rome*, pp.55-83.

12 SMITH, J. M. H., Old Saints, New Cults: Roman Relics in Carolingian Francia, *Early Medieval Rome*, Leiden, 2000, pp.319-339.

13 GUIDOBALDI, F. & A. G. ed., *Ecclesiae urbis: Atti del Congresso Internazionale di studi sulle chiese di Roma (IV-V secolo) Roma 4-10 settembre 2000*, Città del Vaticano, 2002.

14 サンタ・サビーナ木彫扉について, DE MARIA, L., Il programma decorativo della porta lignea di S. Sabina: concordanza o casualità iconografica? *Ecclesiae urbis III*, pp.1685-1699; DE

- SPIRITO, G., La cosiddetta scena dell "acclamatio" della Porta di S. Sabina, *Ecclesiae urbis III*, pp.1701-1723.
- 15 サンタ・プデッツィアーナ・モザイク, 特にエクレシア(教会)の擬人像について, CALCAGNINI, D., Le figure femminili nei mosaici paleocristiani degli edifici di culto romani, *Ecclesiae urbis III*, pp.1949-1938; STEEN, O., The Apse Mosaic of S. Pudenziana and its Relation to the Fifth Century Mosaics of S. Sabina and S. Maria Maggiore, *Ecclesiae urbis III*, pp. 1939-1948; GOFFREDO, D., Le personificazioni delle Ecclesiae: tipologia e significati dei mosaici di S. Pudenziana e S. Sabina,, *Ecclesiae urbis III*, pp.1949-1963.
- 16 サンタ・マリア・アンティークァ NORDHAGEN, P. J., Early Medieval Church Decoration In Rome and "The Battle of Images", *Ecclesiae urbis III*, pp. 2749-1762. 神の子羊について, OPIE, J. L., Agnus Dei, *Ecclesiae urbis III*, pp.1823-1839.
- 17 OSBORNE, J. ed., *Santa Maria Antiqua al Foro Romano cento anni dopo. Atti del colloquio internazionale Roma, 5-6 maggio 2000*, Roma, 2005.
- 18 BRENK, B., Papal Patronage in a Greek Church in Rome, *Santa Maria Antiqua*, pp.81.
- 19 NILGEN, U., The Adoration of the Crucified Christ at Santa Maria Antiqua and the Tradition of Triumphal Arch Decoration in Rome, *Santa Maria Antiqua*, pp.128-135.
- 20 NORDHAGEN, P. J., Is Empiricism Really Worth that Trouble? On the Documentation Techniques Employed in the Study of *Santa Maria Antiqua*, *Santa Maria Antiqua*, pp.213-222.
- 21 *Roma fra oriente e occidente, 19-24 aprile, 2001*, Setimane di Studio del Centro italiano di studi sull'Alto medioevo XLIX, Spoleto, 2002.
- 22 KESSLER, H. L., Rome's Place between Judaea and Francia in Carolingian Art, *Roma fra Oriente e e Occidente*, 2002, pp.665-718.
- 23 ANDALORO, M., L'icone a Roma in Eta Preiconoclasta, *Roma fra Oriente e Occidente*, 2002, pp.719-753; WOLF, G., Alexifarmaka. Aspetto del culto e della teoria delle immagini a Roma tra Bizanzio e terra santa nell'Alto Medioevo, *Roma fra Oriente e e Occidente*, 2002, pp.755-787. アンダローロイは200年末から2001年に開催された以下の重要な展覧会にも触れている。ENSOLI, S., LA ROCCA, E.(ed.), *Aurea Roma: dalla città pagana alla città cristiana*. Roma, c2000.
- 24 O'CARAGAIN, E. NEUMAN DE VEGVAR, C. (ed.), *Roma Felix. Formation and Reflections of Medieval Rome* (Church, Faith and Culture in Medieval West), Aldershot, 2007.; 拙稿, 「新刊紹介 Eamonn O'Carraigan, Carol Neuman de Vegvar (eds), *Roma Felix. Formation and Reflections of Medieval Rome* (Church, Faith and Culture in the Medieval West), Aldershot: Ashgate, 2007. 24cm. 『西洋中世研究』第2号, 2010年12月, 207-208頁。
- 25 WISSKIRCHEN, R., *Die Mosaiken der Kirche Santa Prassede in Rom.*, (Zaberns Bildbände zur Archäologie 5), Mainz am Rhein, 1992; THUNO, E., *Image and Relic : Mediating the Sacred in Early Medieval Rome*, Rome, 2002; GOODSON, C. J., *The Rome of Pope Paschalis I : Papal Power, Urban Renovation, Church Rebuilding and Relic Translation 817-824*, Cambridge, 2010; 拙稿, 「21世紀の西洋中世美術史研究」, 『西洋中世研究』, 第1号, 2009年12月31日, 62-74頁, 特に71-72頁。
- 26 AMATO, P., *De Vera effigie Mariae. Antiche icone romane Roma, Basilica di Santa Maria Maggiore*. 18 giugno -3 luglio , 1988, Roma / Milano, 1988
- 27 KESSLER, H. L., *Old St. Peters and Church Decoration in Medieval Italy*, Collectanea 17, Spoleto, 2002.
- 28 KESSLER, H. L., *Spiritual Seeing: Picturing God's Invisiblity in Medieval Art*, Philadelphia, 2000.
- 29 KESSLER, H. L., *Medieval Art as Argument, Iconography at the Crossroads* (ed. B. Cassidy), Princeton, 1993, pp. 59-70. Spiritual chap 3 2000, pp.53-63 ; 拙稿, 「ハーバート・L・ケスラー



- 「議論としての中世美術」(翻訳), 『富山大学人間発達科学部紀要』第6巻2号, 2012, pp.265-277。
- 30 KESSLER, H. L., Wolf, G., ed., *The Holy Face and the Paradox of Representation*: Papers from a Colloquium held at the Bibliotheca Herziana, Rome and the Villa Spelman, Florence, 1996 (Villa Spelman Studies, Vol. 6), Bologna, 1998. 研究集会での協議が2000年の展覧会に結実した。註5を参照。
- 31 KESSLER, H. L., Configuring the Invisible: Facsimiles and Copies of the Holy Face,” in *The Holy Face and the Paradox of Representation* (Villa Spelman Studies, vol. 6), eds. H. Kessler and G. Wolf, Bologna, 1998, pp. 129-51. *Spiritual Seeing*, chap.4, 2000, pp.64-87.
- 32 KESSLER, H. L., “Thou Shalt Paint the Likeness of Christ Himself:” The Mosaic Prohibition as Provocation for Christian Images,” *The Real and Ideal Jerusalem in Jewish, Christian and Islamic Art* (Jewish Art, vol. 23, 1997/98), pp. 124-39. *Spiritual Seeing*, chap 2, 2000, pp.29-52.
- 33 KESSLER, H. L., The Icon in the Narrative, *Spiritual Seeing*, 2000, pp.1-28.
- 34 木俣元一, 「印章と刻印:西欧中世におけるイメージの隠喩(上)」, 『名古屋大学文学部研究論集』(史学54)(161), 2008, pp.45-5; 同, 「ウエロニカと印章—『グルベンキアン黙示録』の一挿絵をめぐる—」, 『美学美術史研究論集』24, 2010, pp. 59-92 特にpp.66-69; 同, 『顔と顔を合わせて』: 聖顔・痕跡・ヴィジョン, (公開・国際シンポジウム「イメージとヴィジョン:東西比較の試み」, 『死生学研究』16, 2011, pp.10-31.
- 35 NOREN, K., Sacred Memory and Confraternal Space The Insignia of the Confraternity of the Santissimo Salvatore (Rome), *Roma Felix*, 2007, pp.159-187.
- 36 RUSSO, D., et al., Maria, *Enciclopedia dell'arte medievale VIII*, 1997, pp.20236; 抽稿, 「マリア・レギナからキリストの花嫁へ—西欧中世における聖母の勝利図像について—」, 田中雅一 編, 『女神—聖と性的人类学』, 平凡社(共著), 1998, pp.259~298
- 37 JACOBONE, P., Maria a Roma Theologia, culto e iconografia mariana a Roma, delle origini all'Altomedioevo, Todi, 2009.
- 38 FREEDBERG, D., *The Power of Images: Studies in the History and Theory of Response*, Chicago, 1989. 特に6章。
- 39 BAGNOLI, M. et al (ed.), *Treasures of Heaven. Saints, Relics and Devotion in Medieval Europe* New Heaven / London, 2010. 展覧会はクリーブランド美術館, ウォルターズ・アート・ギャラリー大英博物館で開催された。内容に関しては以下を参照。浅野ひとみ, 天国の宝物:中世ヨーロッパの聖人, 聖遺物, 信仰」展(大英博物館 2011), 『美学美術史研究論集』26, 2012年, pp, 89-93。
- 40 秋山聡, 『聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形』, (選書メチエ441), 講談社, 2009, 特に第1章。本書は一般書の体裁をとり, 中世美術に興味を持つ幅広い層を対象にしているが, 著者の数々の成果に基づく論述により聖遺物崇敬に対する理解を引き出す。
- 41 KREGER, D., The Religion of Relics in Late Antique and Byzantium, *Treasures of Heaven*, pp.4-17; CORNINI, G., “Non Est Toto Sanctior Orbe Locus”. Collecting Relics in Early Medieval Rome, *Treasures of Heaven*, pp.69-78.
- 42 THUNO, E., *Image and Relic. Mediating the Sacred in Early Medieval Rome*, Rome, 2002.; 抽稿, 「21世紀」, p.72. パスカリスの宝物のうちエマイユの十字架が, おそらく教化の目的も兼ねてヴァチカン美術館の海外巡回展に出展されることが多く, 図版も豊富にある。宝物の全貌はTHUNO, 前掲書, pl.I-IV.
- 43 CHAZELLE, C., *The Crucified God in the Carolingian Era: Theology and Art of Christ's Passion*, Cambridge, 2001.; 抽稿, 「21世紀」, p.72. シャゼルはカロリング朝写本彩飾や象牙彫刻を中心に扱っている。
- 44 『ヘブライ人人への手紙』9-10章。アンテオキアのコンスタンティノス(インド航海者コスマス)著『キリスト教地誌』挿絵に幕屋と至聖所の図式がある。KESSLER, H. L., Gazing at the Future: The Parousia Miniature in Vatican, Cod. Gr.699, *Byzantine East, Latin West. Art*

- Historical Studies in Honor of Kurt Weitzmann*,  
MOURIKI, et al ed., Princeton, 1995, pp.365-  
371, *Spiritual Seeing*, chap.5, pp.88-103, 特に  
pp.90-93.
- 45 「イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通っ  
て、新しい生きた道をわたしたちのために開いて  
下さったのです」(『ヘブライ人への手紙』, 10章  
20節)。THUNO, op. cit., pp. 157-171.
- 46 秋山, 前掲書, pp. 34-40。
- 47 GOODSON, C., *Building for Bodies: The  
Architecture of Saint Veneration in Early  
Medieval Rome, Roma Felix*, 2007, pp.51-79;  
Idem, *The Rome of Pope Paschalis I*, pp.197-256  
(chapter 5)..
- 48 SOT, M., Configuration d'un texte hagiogra-  
phique au IXe siècle. : la Translation des  
reliques des Saintes Marcellin et Pierre,  
*Configuration du texte en histoire*, <Proceedings  
of the 12<sup>th</sup> International Conference Herme-  
neutic Study and Education (9世紀のある聖  
人伝テキストの布置: アインハルト『聖マルケリ  
ヌスとペトルスの聖遺物奉還』, 『歴史におけるテ  
クスト布置』, 「テキスト布置の解釈学的研究と教  
育」第12回国際研究報告書), Nagoya, 2012, pp.  
5-15, 145-156.
- 49 DUTTON, P., E., *The Politics of Dreaming in  
the Carolingian Empire*, Lincoln, 1994, pp.45-  
48.
- 50 NOBLE, T. F. X., *Images, Iconoclasm, and the  
Carolingians*, Philadelphia,, 200, esp. pp.207-  
247, 254-260; 拙稿, 新刊紹介 Noble, Thomas F.  
X., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*,  
Philadelphia, University of Pennsylvania Press,  
2009, 488pp.. \$ 65.00. 『西洋中世研究』第3号,  
2011, pp. 200-201.
- 51 BARBAR, C., *Figure and Likeness: On the  
Limits of Representation in Byzantine Iconoclasm*,  
Princeton, 2002.

(2012年10月22日受付)

(2012年12月19日受理)